

内 容 目 次

主 論 文

Descriptive Study on Gender Dysphoria in Japanese Individuals with
Male-to-Female Gender Identity Disorder

(性同一性障害 MTF male to female 当事者の性別違和感に関する記述的研究)

篠原好江, 中塚幹也

ACTA MEDICA OKAYAMA (掲載予定)

主 論 文

Descriptive Study on Gender Dysphoria in Japanese Individuals with Male-to-Female Gender Identity Disorder

(性同一性障害 MTF male to female 当事者の性別違和感に関する記述的研究)

[緒言]

日本において、性同一性障害（GID gender identity disorder）とは、身体的性別とジェンダーアイデンティティが一致しないことが明確であることをいう（日本精神神経学会，2012）。性別違和感は一面的なものではなく、人それぞれに持つ感覚は多様であり、性別違和感に伴う体験も多様であると考えられる。「性別違和感」は、社会生活を送る上での困難の根源であり、医療的介入により変化する可能性がある。しかし、ホルモン療法や SRS により、身体が変化しても、全ての例で性別違和感が緩和されるわけではない。また、文化や宗教などにより異なる可能性もある。日本における GID 当事者の「性別違和感やそれに伴う体験」の実態は明らかではない。今回、私たちは、日本人の GID 当事者、特に社会生活への適応が困難な傾向にあるとされる MTF 当事者に焦点を当てて、性別違和感とはどのようなものであるかを明らかにするとともに、医療的介入のあり方を検討した。

[方法]

1.対象・方法

2015年8月～2017年4月、MTF 当事者 11 名に対して、半構造化面接を行った。MTF 当事者 11 名は、すでに GID の診断を受けており、何らかの治療を受けていた（表 1）。面接回数は 1 回であり、所要時間は 60 分を目安とした。MTF 当事者の承諾を得て、録音し、フィールドノートにメモをとった。対象者の背景として、年齢、職業、出生地・環境、家族背景、教育、宗教について質問した。「性別違和感」「自分の性に関する体験」について尋ねたが、基本的には対象者の自由な語りに任せた。

面接内容を逐語録に起こし、文脈に留意しながら意味の読み取れる単位で抽出した。

- 1) データの圧縮：意味のあるまとまりを抜き出し、対象の言葉を使用し相違点・共通点の比較によつての分類整理を行い、サブカテゴリーを抽出し、さらに抽象度をあげてカテゴリー化を行った。
- 2) データの表示：データの圧縮作業によつて得られたカテゴリー間の関連について、性別違和感に関する語りの時系列を意識して整理し、質的記述的分析を行った。

2.倫理的配慮

対象者に研究目的と方法を説明した後、研究参加にあつての自由意思の尊重、公表に際しての匿名性と個人情報の保護、データ管理について文書を使用して説明を行い、書面による同意を得た。なお、本研究は岡山大学大学院保健学研究看護学分野倫理審査委員会の承認を得て実施した（審査整理番号 D15-02）。

[結果]

1. 対象者の背景

対象者の年齢は、 39.9 ± 13.7 [21-65](mean \pm S.D[range])歳であった(表1)。職業は、無職、会社員、団体職員、医療・福祉職、アルバイト、接客・販売業他等であった。面接時間は、 49.5 ± 14.0 [36-85]分であった。

2. カテゴリーの抽出と分析結果

時系列を意識して、性別違和感に関する語りを解釈した結果、「性別違和感の発生」「性別違和感を自覚する体験」「医療を受けたことによる変化」(表2)の3つに分類できた。

「性別違和感の発生」では、分析の結果、1カテゴリーと3サブカテゴリーに統合された。

「性別違和感を自覚する体験」では、4カテゴリーと10サブカテゴリーに統合された。「医療を受けたことによる変化」では、2カテゴリーと4サブカテゴリーに統合された(表2)。

[考察]

1. 「性別違和感」という主観的な体験の特徴

1)性別違和感の発生

今回の研究のほとんどの対象者が性別違和感を幼少時、あるいは小学校・中学校時代に持ち始めており、先行研究と同様の結果であった(中塚,2013, 平山他,2012)。また、性別違和感の発生を対象者の年代別に比較してみたが相違はなかった。

性別違和感を持つことにより、周りとは違うと感ずること、また、それを言い出すことができないことで、自己肯定感も低下する。人格の基盤を作る幼少から思春期までの時期における、このような状況は、性同一性の確立へ大きな影響を及ぼすこととなる。そのことから、【性同一性への疑問・混乱・嫌悪】を持ち、自我同一性に性同一性を統合できないことは、当事者の非常な苦痛や困難を増強していると考えられる。

2)性別違和感を自覚する体験

性別違和感を自覚する体験はすべての対象者が程度の差は見られるものの負の体験として語っていた。【身体的性別への苦痛と苦悩】や日常生活を送る中で常に、【性別違和感から発生する社会的体験】が見られていた。社会や他者との関係の中で本来の自分であることに対する葛藤が生じていた。WPATH(2012)は、ジェンダーへの非同調性に対するスティグマが、世界中の多くの社会にみられる(WPATH,2012)としているが、人間関係形成には不可欠な人と人との相互作用における出来事は、人によって様々であったとされる。このように、ジェンダーへの非同調性に対するスティグマは日本の社会にも広がっている。

多くの人々は日常生活の中で、自分の性別についての迷いや疑問はあまり生じない。そのような中で、性別違和感を自覚している自分自身が普通ではないと思っているために、他の人々に【性別違和感について告白できない体験】が生じてくる。性同一性に関する違和感をもつ人は、対象者の語りにあるように、常にその性別について悩まされ続け、その行き場のない思いや憤り、悔しさははかり知れないほど強い。

対象者の性別違和感に関する個人の歴史、および診断・治療についての語りからは、時

代による社会の変化の影響が大きいことを否めない。40代、50代の対象者が幼いころから持つ強い性別違和感をすくい上げる医療機関が存在していたならば、家族、社会における認識やとらえ方は違う形を取っていたと考えられる。また、社会的な「性同一性障害」への認知が低かった時代の子ども之苦痛や苦悩は深刻なものであったと推測できる。「男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく」という子ども時代に求められる社会的性役割を遂行できないことへの葛藤は大きかった。加えて、語りの中にあるように、性別違和感を持ちながら日本の「家制度」における男子としての役割を果たすことを期待されていた。性別違和感に対する苦痛や苦悩を直接的に、また、容易に取り除くことはできないが、現在では、社会全体がGID当事者を受け入れる素地を形成しつつある。

3)医療を受けたことによる変化

対象者11名の全員が、医療的な情報を獲得したことで、また、何らかの治療を受けたことで、「性別違和感が和らぐ」「本来の自分を取り戻す」状態になり心身ともに安定したというような体験の変化があったとしていた。各人それぞれが各種の治療を受けているが、これまでの性別にかかわる生活体験に比べ良い方向に変化していた。身体的・心理的・社会的それぞれの側面に様々な課題を持つ当事者において、ジェンダークリニックでの各種の情報提供やホルモン療法や手術などの医療的介入による身体的変化は、全ての例で心理・社会的側面に良い影響を及ぼしていた。過去の報告では医療的介入の負の側面も知られているが、今回の研究では見られなかった。治療により身体的な障害が取り除かれるのではなく、精神の安定が得られるという点は、GIDの特性と考えられる。

[結論]

「性別違和感」という主観的な体験の特徴をふまえ、医療者の関わりとして以下の3点が示唆された。1)当事者の語りを受容的に聴く。2)社会の中で生活をして懸命に生きていく当事者のケアを継続的に行う必要がある。3)性同一性の確立を支援する。

引用文献

平山峻, 山口悟, 藤本真理(2012).性同一性障害400例について, 日美外会誌, 48(2),141-145.

中塚幹也(2013).学校の中の「性別違和感」を持つ子ども 性同一性障害の生徒に向き合う, JSPPS 日本学術振興会科学研究費助成事業 23651263「学校における性同一性障害の子どもへの支援法の確立に向けて」1-46.

日本精神神経学会・性同一性障害に関する委員会(2012).性同一性障害に関する診断と治療のガイドライン(第4版), 精神神経学雑誌, 114(11), 1250-1266.

WPATH(World Professional Association for Transgender Health)(2012).Standards of Care for the Health of Transsexual,Transgender,and Gender Nonconforming People seventh version,4-6.

表1 対象者の背景

対象者	Age	治療の既往	婚姻	子ども	面接時間
1	20代前半	ホルモン治療	無	無	55分
2	30代後半	ホルモン治療	無	無	63分
3	30代後半	ホルモン治療, 陰茎切除術, 精巣摘出術, 造陰術	無	無	85分
4	30代前半	ホルモン治療	無	無	48分
5	30代前半	ホルモン治療	無	無	43分
6	40代後半	ホルモン治療	無	無	58分
7	50代前半	ホルモン治療	無	無	50分
8	50代前半	ホルモン治療	無	無	62分
9	50代後半	ホルモン治療, 陰茎切除術, 精巣摘出術	無	無	39分
10	50代後半	ホルモン治療, 陰茎切除術, 精巣摘出術	有	1人	42分
11	60代後半	ホルモン治療, 陰茎切除術, 精巣摘出術	有	3人	36分

表2 性別違和感の語り

分類	カテゴリー	サブカテゴリー
性の別発達生和感	性同一性への疑問・混乱・嫌悪	普通とは違って、おかしい
		本当にこの性別か？
		身体的性別に基づくカテゴライズへの嫌悪
性別違和感を自覚する体験	身体的性別への苦痛と苦悩	苦悩やショック
		思春期における苦痛
	性別違和感から発生する社会的体験	行動や出来事を通しての違和感
		人から気持ち悪いと思われる
		制服に憧れる
	性別違和感から発生する性同一性に対する感覚的確信	水着や着替えが苦痛
		反対側にいる
		別な性で生きたい
	性別違和感について告白できない体験	誰にも言えない
		親に言えない
医療を受ける変化	情報収集で得た制約からの回避	情報を獲得する
		気持ちが安定する
	治療後の心の安定	性別違和感が和らぐ
		本来の自分を取り戻す